

「2025年大阪・関西万博」から考える —万博から、今われわれが学べること

公益財団法人中部圏社会経済研究所 企画調査部長 松田 直己



はじめに

2025年4月13日から、「2025年大阪・関西万博」（以下、「大阪・関西万博」）が約半年間の期間で大阪府の夢洲（ゆめしま）地区で開催されている。

中部圏でいえば、2005年3月25日から9月25日にかけて開催された「2005年日本国際博覧会（通称：愛知万博、愛・地球博）」からちょうど20年が経過したところである。^(※1)

大阪・関西万博については、事前の一般的な報道からはあまりポジティブなものを見聞きすることが少なかった印象であるが、それは愛・地球博でも開催前は同様の状況であったと思われる。そのような中で、この博覧会からわれわれは何を学び得るのかという点を少し考えてみたい。私は、少子高齢化・デジタル化・働き方改革など種々の変化の真ただ中で「社会課題の解決に取り組む」とあらゆるセクターが声高に叫んでいる時に、そこに少しでも学ぶ余地を見出すことが大切ではないかと思っている。

私事であるが、電動車イスをを利用している筆者の在熊本の友人から家族を連れて大阪・関西万博に行きたいが一緒に行かないかという誘いを受けて、2025年4月14日（月）に行く機会を得たので、上記のような問題意識を心に秘めながら見て回り、「中部圏研究」読者の皆様にも何らか考える機会となればと考え、寄稿する次第である。

1. 日本で開催された主な博覧会

まず、日本で開催された主な博覧会をみてみたい。おおそ西暦の5の倍数の年に開催されている登録博（2000年開催までは一般博と呼ばれた^(※2)）のうち、日本開催は今回の大阪・関西万博を含めて表1の3回である。

1970年は数年先に発生するオイルショックを前にした高度経済成長期の末期、2005年はその前年に開催されたCOP10を受けた京都議定書の発効など地球温暖化・環境保全がよりクローズアップされた時期、そして今、2025年は、アフターコロ

(※1) 会場となった愛知県長久手市の愛・地球博記念公園では、「愛知万博20周年記念事業」として、現在「愛・地球博20祭」が開催されている。
<https://aichiexpo20th.org/>

(※2) 5年ごとの登録博（world expo）と、登録博の間に開催される認定博（specialised expo）BIE（Bureau International des Expositions）公式サイト：<https://www.bie-paris.org/site/en/>

ナにおける新しい生活様式、デジタル化、カーボンニュートラル、well-beingなど、新しい社会づくりの潮流の中にいる時期での開催であり、それぞれの時代に即したテーマが提示されていることをあらためて認識できよう。

ただ、先の2つの万博のテーマが「科学技術との調和」、「環境との調和」といった、万博後のレガシーとして比較的共有しやすいものであったのに対し、今回の大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は、テーマから抱く未来社会像はまちまちであり、「万博に足を運んだ方々がどのような考え・思いを馳せるか」というところがポイントになると考えられる。

あわせて、「人口減少、高齢化社会が…」と最近の社会課題の文脈で出てくる、「人」の状況について、表1の下半分にそれぞれの時期の日本の人口、年齢構成、平均寿命を示してみた。1970年は第2次ベビー・ブームの流れで急速に人口が増えていた時期、2005年は人口がほぼピーク^(※3)の時期、そこから2025年（社人研推計）までの20年間で人口が4百万人強（約3.5%）減少してきている。

また、年齢階層別人口でみれば、15～64歳のいわゆる生産年齢人口は2025年がほぼ1970年の大阪万博時並みとなり、2005年比では約13%の減となっていること、14歳までの人口に至っては1970年の水準からほぼ半減となっている。そして、平均寿命の急伸と「団塊の世代」の高齢化が相まって、1970年に人口の1割にも満たなかった65歳以上の、いわゆる高齢者人口は、今や3割となっている。

以上、ごく当たり前のことではあるが、大阪・関西万博を見に行くうえでの足元の社会環境は大きく変化していることを、万博の理念や人口といった形でいま一度おさえてみた。そして、先述したように、今回の大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」から抱く未来社会像はまちまちだと考えられる中、この万博で何を考え得るか、何を示唆し得るかといった点について、地域の調査研究を進める立場から、実際に万博に足を運ぶ中で考えてみたいと思う。特に、海外からの展示については、さながら四国八十八か所巡りの「お砂踏み」^(※4)のように、海外の事例を直接目や耳にしにくい方たち（筆者も含めて）が、日本

名 称	1970 年日本万国博覧会 (大阪万博)	2005 年日本万国博覧会 (愛知万博、愛・地球博)	2025 年日本万国博覧会 (大阪・関西万博)
テ ー マ	人類の進歩と調和	自然の叡智	いのち輝く未来社会のデザイン
場 所	大阪府吹田市千里丘陵	愛知県長久手市、瀬戸市、 豊田市	大阪府大阪市夢洲地区
参 加 国	77 カ国と 4 つの国際機関	121 カ国と 4 つの国際機関	158 カ国・地域と 7 つの国際機関
総来場者	約 6,422 万人	約 2,200 万人	約 2,820 万人（予測）

日本の人口※		104,665 千人	127,768 千人	123,262 千人
年 齢 別 ※	0～14 歳 (出生児数)	25,153 千人[24.0%] (1,932 千人)	17,521 千人[13.8%] (1,087 千人)	13,633 千人[11.1%] (774 千人)
	15～64 歳	72,119 千人[68.9%]	84,092 千人[66.1%]	73,101 千人[59.3%]
	65 歳～	7,393 千人[7.1%]	25,672 千人[20.2%]	36,529 千人[29.6%]
平均寿命男性		69.31 歳	78.56 歳	81.99 歳
平均寿命女性		74.66 歳	85.52 歳	88.06 歳

表1 1970年大阪万博、2005年愛知万博、2025年大阪・関西万博および開催当時の人口等

※1970年、2005年：人口は国勢調査値、平均寿命は厚生労働省の簡易生命表
2025年：国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の2023年4月公表の出生・死亡中位推計値
上記より筆者作成

(※3) 日本の人口ピークは2008年（128,064千人、人口動態統計による）。

(※4) 四国八十八か所霊場会HPより「お砂踏み」：<https://88shikokuhenro.jp/osunahumi/>

に居ながら海外における考え方を知り、日本の将来に生かしていくという観点から見ていきたいと考えている。

2. 実際に「大阪・関西万博」を訪ねて

(1) 来場者数

筆者が大阪・関西万博を訪れたのは2025年4月14日月曜日、開会から2日目、開会后初めての平日で、来場者は初日の約11.9万人と比べると半数以下の約5.1万人（関係者を含まない）であった。^(※5)

当日の新聞から初日の入場にかかなり時間を要するとの報道もあったが、この日は9時の開場から20分程度で入場することができた。

大阪・関西万博の入場見込み数は表1で示した通り約2,820万人で、うち外国人が約350万人（約12%）と推定されているが、当日の肌感覚としては、約半数が外国人と思われた。外国人は曜日を問わず来場すると仮定すれば、外国人約350万人を会期数（184日）で割ると1日平均2万人弱であるので、このことから考えると、インバウンドでは比較的順調に来客数を確保しているといえる

かもしれない。

また、事前に参加を見送る自治体も出るなどとの報道もあった学校単位での子どもの招待について^(※6)でも、開場時点で高校生など数校が来場していたが、まだ新年度・新学期が始まったばかりでもあり、開場中もそれほど多くはない印象であった。

(2) 展示物

はじめに、報道などでは「開幕までに間に合うのか」といった論調が多かった中で、筆者訪問時には未完成の展示館はインドやブラジルなど数か国のみであったことから、開会に向けて精力的な施工対応が図られたことがうかがわれ、あらためて工事関係者への敬意を感じたところである。^(※7)

冒頭に述べた通り、予約状況や、展示館によっては長い行列もあり、すべてを把握できたわけではないが、外観や筆者の友人が展示物を見た限りでの意義や課題をみてみたい。特に広域シンクタンクの立場として、本来の万博の意義にもつながる「世界を学ぶ」視点、そして大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の視点からも考えてみたい。

まず、G7のような先進国の展示館は展示規模

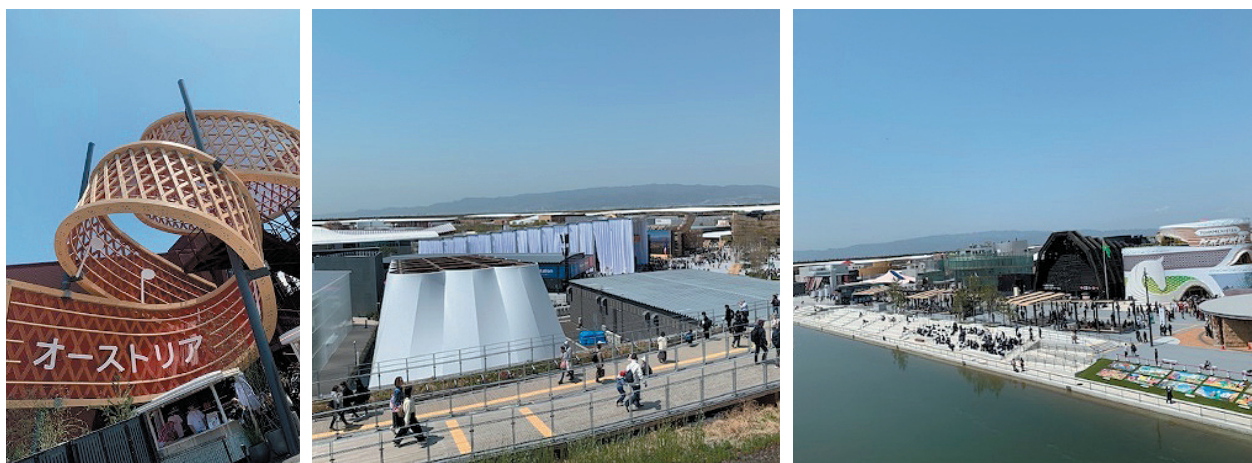


写真1 大阪・関西万博の開場前風景

(※5) 読売新聞オンライン「万博2日目の来場者数5万1,000人、初の平日で初日から半減」
<https://www.yomiuri.co.jp/expo2025/20250415-OYT1T50095/> (2025年4月16日閲覧)

(※6) 大阪府「万博子ども招待事業について」
https://www.pref.osaka.lg.jp/o090135/kodomo_seisyonen/banpakusyoutai-f01/index.html

(※7) 日本経済新聞（電子版）「大阪万博、チリとブラジルパビリオン開館 未完成4カ国に」
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF1644P0W5A410C2000000/?msoclid=29c47a217cd762543cc06f847d05636c> (2025年4月16日閲覧)



(写真2) さまざまな趣向が凝らされた建物

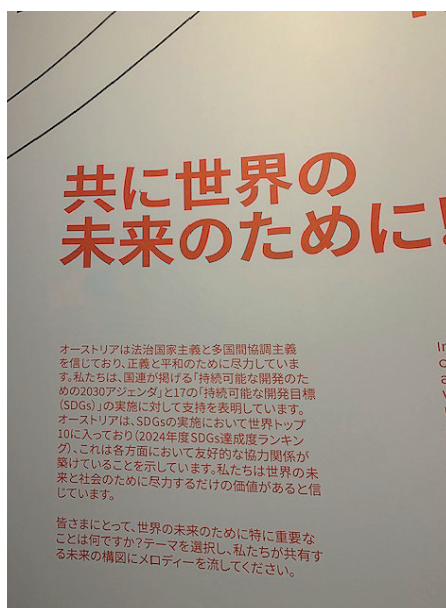
も大きく行列もできていた。筆者が入った国（カナダ、英国）の展示館もそうであったが、やはり将来のビジョンやコンセプトを伝えるものが多い印象である（写真3）。それは、先進国として新しい世界をけん引していくというメッセージである一方、考え方がより多様化する時代の中で、どのように将来を捉えていくかという点については見る側の工夫がより求められる内容だと感じた。

一方で、それ以外の国では、中東・アジアを中心に大規模な展示館が展開されるとともに、例えばオーストリア館ではこれまでの日本との関係にも触れながら、新たな技術や社会への挑戦にも言及するなど、日本とのつながりの中で国を知ってもらおうとする工夫がなされており、「世界の国をいま一度知る」というシンプルな観点から捉えるだけでも価値があるものと感じた（写真4）。

また、全体的に言えることだが、各国の展示館では各国出身の方が日本語で対応しており、その方々の説明も丁寧であった。これも各国をリアルに知る機会として印象深いものになるだろう。



(写真3) VRを活用したカナダ館のコンセプト紹介



(写真4) 各国の展示コンセプトの案内（左：オーストリア、右：スイス）

（３）教育機会としての万博

先述した大阪府の「万博子ども招待事業」等のように、大阪・関西万博は地域の子どもが学ぶ場としても機能しており、無料のパスを申請した学校の児童・生徒に配布している（会場で学生が提げている当該事業の無料パスを見た）。

子どもにとっては、展示館を楽しむことを通じて諸外国や未来の可能性を知ることが重要であり、招待事業の意義を深めることにつながる。

多様かつより複雑化した社会・国際状況において、子どもと教育者側がともにアップデートするよい機会だといえよう。また、先項で述べたように、各国の展示館で各国の出身の方が説明してくれるというのはまたとない機会であり、そういう経験の積み重ねが将来に生かされるという視点から育つものがある意義を感じたところである。

地域づくりの研究の中でも、教育が大きな役割を果たすという意見が出てくるが、その原動力の一環となる底上げが、この万博で果たすことができるのではないだろうか。

（４）万博のホスピタリティ

最後に、大阪・関西万博のホスピタリティや施設環境について触れておきたい。これは、万博のみならず、中部圏でいえば2026年の愛知・名古屋アジア大会およびアジア・パラ大会での地域ホスピタリティにも参考になる視点ではないかと考えられる。

【車椅子目線での活動】

私の友人は電動車椅子を利用しており、今回の万博訪問で車椅子利用者の目線からいろいろと確認する機会を得ることとなった。大阪市内から万博会場へは地下鉄を利用して会場入り口までスムーズに移動することができた。大阪メトロ中央線は新しい車両で車椅子スペースも充実しており、周りの皆さんの親切もいただきながら安心して移動できた。ただ、高齢化の影響であろうか車椅子の

利用者は多くなっている印象であり、駅のエレベーターでは乗れるキャパシティは大きいながらも待ち行列ができたりしていたので、万博に限らず、新たな時代に向けたインフラのバランスという点については課題があるかもしれない。もっとも、駅から見れば万博は一時的な施設なので、過剰な設備形成ができないという点もあるのかもしれない。

展示館においても、車椅子の来場者へのスタッフの配慮は行き届いており、見学スペースの設定をしている展示館もあるなど、友人本人にも確認したところ、ストレスを感じるようなケースは見当たらなかったとのことであった。パビリオンの中には直接参加できるものもあった（写真５）

１点だけ、友人の車椅子は電動であったため、会場内での頻繁な移動の結果バッテリーの残量が予想以上に少なくなり充電が必要となったのだが、その充電インフラの確認に時間を要した。インフォメーションのコンシェルジュや会場内の警備の方、^{（※８）} 会場で提供されているパーソナルモビリティの担



（写真５）車椅子のまま、ゲームに興じる（電力館）

（※８）大阪・関西万博『未来社会ショーケース事業出展』『スマートモビリティ万博・会場内来場者向けパーソナルモビリティ』の協賛概要が決定（2025年3月26日公益社団法人2025年日本国際博覧会協会プレスリリース）<https://www.expo2025.or.jp/news/news-20250326-01/>

当者はいずれも親切に対応していただいたが、それぞれ自らの判断では対応できず、結果「たらい回し」となり、パーソナルモビリティの駐車場にある充電施設（コンセント）の一時的な利用をインフォメーションの責任者から協会本部に了承いただき、なんとか事なきを得た。これは、報道にも出ていたが、会場で携帯電話の電波がつながりにくく、ゆえに充電の残量も減りやすいというところにもあらわれたような、「コト」消費が重視される時代に当たり前の前提として抜けがちな「モノ」（インフラ）の重要性という課題を浮き彫りにしているのではないかと感じた。

万博開始間もないところもあり、致し方がない部分もあるかもしれないが、繰り返し来場できる人は限られていることや、「ホスピタリティが悪いと来てもらえない」という危機意識のある近隣のテーマパークでの対応など、ベンチマークし得るものもある。今回対応いただいた方々も「足りない部分を補っていきたい」と語っておられ、今後の状況改善を期待したいところである。

【若年層の活躍】

筆者の印象として、インバウンドが来場者全体の半分程度という中で、多言語対応で活躍する若年層の係員が目をつけた。通常係員は、来場者に対し応需的に対応するシーンが多いものだが、彼（女）らは、積極的に来場者に話しかけていたし、自らが楽しんで対応している方が多かった。このような経験が、インバウンドとの交流をはじめとしたさまざまな関係人口構築の契機となることが期待される。また地域の側からすれば、このような若年層を創出していく一つの機会とし、将来的な地域力の強化へつながる意識を持つことが重要なのだろうと感じた。そして、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」の一つのキーファクターになり得ることは言うまでもないであろう。

開催まで残り1年強の2026年の愛知・名古屋アジア大会およびアジア・パラ大会でも、このような若い力と、それを支える地域の力、それを生み

出す仕組み・仕掛けに期待したい。

3. まとめ

冒頭で四国八十八か所の「お砂踏み」に例えたが、大阪・関西万博は世界各国の「今」や「未来」が集結している場所であり、それは、「日本に居ながら世界各国が今考えていることを学べる機会」であるということを認識したうえで、「誰に」、「何を」学んでもらうかが、地域や人、ひいては日本の発展につながるのかということにいま一度思いを馳せながら、この万博を活用する視点があってもいいのではないかと感じた次第である。万博を単に「イベント」と捉えるだけでなく、新しい社会を創り出すためのクロスポイントとして意識することで、さまざまな人にあらゆる可能性を巡らせることができるのではないだろうか。

そもそも万博が必要かどうかについては賛否両論あるだろう。ただ、今、目の前に大阪・関西万博がある中でそれを活用しつくすという観点からは、日本の「地域の強み・弱み」を再認識しながら新しい可能性に思いをはせ得る場であることも確かであるし、とにかく「失われた30年」と言われる中で、日本の停滞の横で諸外国がどのようになってきたのかをあらためて確認・再認識する場にもなるのではないだろうか。

この調査季報が出る6月時点では、あと会期は4か月ほどある。そのような視点から万博を眺めてみることもお勧めしたい。そのことが、「いのち輝く未来社会のデザイン」の一助となるはずであるし、あらためて世界を「お砂踏み」的に眺め直す機会になるはずである。

最後に、当日大阪・関西万博を楽しみながらも、「地域のお役に立つことなら車椅子のことも書いていいですよ」と言って、いろいろ意見をくれた筆者の友人とその家族に感謝を申し上げたい。

（文中写真＝2025年4月14日撮影＝松田直己）